



じょうもんじだい

縄文時代の人々は、どんな家に住んでいたの



地面を少しほり下げてつくった、たてあな住居に住んでいたんだよ。

たてあな住居のつくり方

じょうもんじん

縄文人の家は、たてあな住居とよばれます。そのつくり方は、次の通りです。

地面を深さ50センチメートルほどほり下げ、ほった土を周りに盛る。次に、たてあなの床面にあなをほり、4～6本の柱を立てる。それぞれの柱に「けた」をかけ、ななめ材を組んで、いちばん上に「むな木」をのせる。ななめ材の間に「たる木」を並べ、「たる木」を結ぶ横木をかける。屋根の下のほうから「かや（ちがや・すげ・すすきなどの草）」をふいて、できあがり。このようにしてできた住まいは、夏はすずしく、冬は暖かだったようですが、床が地面より低い^{ゆか}ため、しっ気が多いのが欠点でした。

たてあな住居のつくりにも、いろいろあった

たてあな住居のつくりは、時期や^{ちいき}地域によって、いくつかのちがいが見られます。縄文時代の初めごろの北海道や東北地方では、柱がなく、あなの周りからななめ材を立てて、屋根を土でふきました。縄文時代の中ごろからは、柱を立てましたが、屋根全体を「かや」でふくようになる前には、土でふくものや、上のほうは「かや」、下のほうは土でふく二段式のもの^{だん}もありました。また、側面にかべをつくったものもあったようです。

